

## 「あおぐみだより」(年長組)より抜粋

### 小学校体験3日目

小学校の環境に少し慣れてきた3日目、学校探検をしました。「廊下から小学生の立派な姿を見られたらいいな」そんな気持ちで出かけて行きました。「賢い青組さんだから、もしかすると教室の中に入れてくれるかもしれないよ」なんて、冗談を交えながらの出発でした。

3年生が算数をしていました。矢野先生が青組さんに気付いて「入っていいよ」と声をかけてくれました。「やっぱり、私たち賢い?!」と、喜んで教室の中へ入らせていただきました。先生の質問にさっと(本当にさっとでした)手を挙げ、答えようとする3年生。ちょうどHくんのお兄ちゃんが指名されました。黒板の前で指示棒を使って説明する姿は格好よく、青組の子ども達は釘付けでした。どんどん前のめりになり、とうとう黒板の真ん前に陣取ってしまいました。小数の足し算。理解は難しいけれど、しっかり聞いていました。3年生はきっと黒板が見えなかったでしょう。でも、青組さんの真剣な姿に、黙っていてくれたのだらうと思います。後で矢野先生に何うと、Hくんのお兄ちゃんの指名は偶然だったそうです。しかし、この偶然が、Hくんのやる気に火を付けました。運がいいと言えばそれまでですが、偶然をうまい方向に取り入れていく力って大事だと、私は思います。



発表を前のめりになって聞く人たち

5年生の社会にもおじゃましました。5年生も教室の中へ入れてくれました。「やっぱり私たち賢い?」天にも昇る気持ちでした。ここには、Tくんのお兄ちゃんがありました。「おにいちゃん!」と笑顔で近づいて来る園児に、お兄ちゃんもまんざらではない様子でした。「教科書、見てもええぞ!」ぶっきらぼうではありましたが、4月からの新1年生への愛情をしっかりと感じました。進められたら、もちろん拒まない園児です。ぎっしり文字が詰まった教科書を見て驚いていました。こんな難しいことを理解できる5年生へ憧れを抱いたことでしょう。小学校のみなさん、本当にありがとうございました。



こんな教科書が分かる5年生ってすごい

学校体験を終え、自分たちの教室に戻ってきました。Hくんは、真っ先に黒板の前に立ち、黒板をバンバン叩きながら発表のまねっこをしていました。先ほどのお兄ちゃんの姿が心に残ったのでしょうね。先生役になる子や机に座って姿勢を伸ばしている子など、小さな先生や小学生がたくさんいました。

いよいよ自分たちも授業を受けてみようということになりました。ありがたいことに、小学校の好井先生が「ぼくでよければ」と算数の授業をかって出てくださいました。(探検も一緒に行ってくれていました)好井先生が教壇に立った瞬間、ピーンと空気が張りつめ、一気に授業を受ける雰囲気。「小学校体験の中で、これこそ僕たちがやりたかったことなんだ」と子ども達の背中が語っていました。「これ(1)は何でしょう」と好井先生が黒板に「1」と書き、質問しました。子ども達は分かることが嬉しくてたまらないようで、これ以上伸びないというほど手を長く?挙げていまし

た。ノートをもって、1 ページ目に数字をいっぱい書きました。15 分間書き続ける集中力。やらされて書くならこれほど集中はしないでしょう。書きたい、学びたいという気持ちが、書ききる姿につながったのだと思います。



はい！手をピンと伸ばして



初めてのノートに真剣に向かっています



「起立、礼」あいさつにも挑戦

### 小学校の先生が青組にやって来たよ

25 日(火)に2年担任の片岡先生、28 日(金)に好井先生が青組に遊びに来てくださいました。特に好井先生は、小学校体験で縄跳びの交流活動と学校探検、算数の授業を一緒にしてくださった先生です。子どもたちは、朝から「好井先生が来たら、一緒に遊ぶ」と楽しみにしていました。

好井先生が、大きな荷物を持ってやって来ました。子どもたちは荷物に釘付けです。話を伺うと幼稚園生活を十分に楽しみ、小学校体験もバッチリ頑張った青組の子ども達へ、坂井校園長先生から卒園記念のプレゼントでした。意気揚々と記念品を受け取り、一気に作り始めました。好井先生は、自由に描いていく子ども達一人一人に声をかけ、出来上がった絵を心から楽しんでくださいました。「かぶとむしランドセル」の絵本も読んでくださいました。「クワガタ先生みたいに怖い先生は、小学校にはいないから安心してね」「1年生になって、もし困ったら、好井先生がかぶとむしランドセルみたいに助けるから大丈夫だよ」と励ましていただき、安心した子ども達です。

子ども達の不安を取り除き、入学してくることを心待ちにしてくれている附属小学校の先生方、本当にありがたいです。



卒園記念のプレゼントなんだ



好井先生って面白いなあ



「かぶとむしランドセル」みたいに好井先生が助けるから、安心して小学校においで！



カッコよく挨拶がしたくなったの

## 「7人は、どう分けても3人对4人だよ」(スタートカリキュラムにつながる経験の例)

毎年修了が近づいてくると、青組の子ども達は、サッカーやドッチボール、宝取り鬼ごっこなど、チームに分かれて競い合う遊びに夢中になります。これまで、勝ち負けへのこだわりは少なく、遊びの行方そのものを楽しんでいた子ども達の中に、「公平さや互いのルール遵守を求め、その中で勝ちたい」という高度な気持ちが育ってくるのでしょうか。よって、勝敗を左右するチームづくりがとても大事になり、大人には無駄としか思えないほど時間をかけます。「グッパーしよう」「いやいやじゃんけんしよう」「いや、グーとチョキで分かれよう」(どれでもいっしょやろ!と思うのは私だけ)といった感じです。やっと決まったと思っても「もう一回分かれよう」とまたやり直します。

先日、私を入れて6人が、やっとの思いで3人对3人に分かれ、サッカーが始まりました。私のチームは女の子がいるチーム。それを見ていたK君が「仲間に入ってあげる」と途中参戦。見事得点を重ねることができたのです。もちろん、相手チームは黙っていません。「ぼくらは3人。そっちは4人。勝つのは当たり前。卑怯や」と言い始めました。「女の子がいるんだからええやろ」「でも一人は先生やん」「今から頑張って、点を取ったらええやん」「作戦を考え直したら?」と、人数にこだわらない意見がたくさん出てくる中、どうしても人数にこだわるYさんとRさん。半強制的に「Kくん、ぼくたちのチームに入ってよ」と言い始めました。当のKくんは、躊躇しています。彼は、勝ち負けよりも、均衡したゲーム展開の中で、作戦や技術を駆使することを楽しみたい人。「ぼくは、このチームの方が面白い」と言い張りました。しかし、「3人对4人で、そっちは人数が多いから卑怯や」と怒りがますます沸騰します。そこで、Kくんがぼそっ一言。「僕がそっちのチームになっても、3人对4人は変わらないよ。7人ってそんな数やろ」と。一瞬、時間が止まりました。YさんとRさんが「ほんまや」と大笑い。自分たちのこだわりのおかしさに気付いたのでしょう、何事もなかったかのようにサッカーが再開しました。

これから小学校へ進学し、教科書の中で数の合成について学習します。しかし、子ども達は、それより以前に、生活の中で必要感のもと、数の特徴や概念、便利さを学んでいるのです。幼児期の子供達には、やはり、このような数の便利さや必要感を実感する体験や、状況に合わせてチームやルール、遊び方を柔軟に変えていく「多様性」を受け入れる体験を大切にしたいと思います。



どうやってチームを決める?グッパー?  
それともじゃんけん?



そっちは4人だから卑怯やろ!  
そんなことないわ!